

中学校社会科「ヨーロッパ州」における単元構成の再検討 — 発問を手がかりとした授業実践の見直し —

学 籍 番 号 2 4 9 3 0 9

氏 名 上 山 直 人

大学院主指導教員 松本 啓二郎

大学院副指導教員 山 田 周 二

1. 研究の背景と目的

近年の学校教育においては、文部科学省が示す「主体的・対話的で深い学び」が求められており、知識の量を問う学習から、学習者が自ら考え、判断し、表現する力を育成する学習への転換が進められている。また、現行の学習指導要領における中学校社会科では、社会的事象を多面的・多角的に捉え、その背景や要因を考察する力の育成が重視されている。こうした流れの中で、授業における教師の関わり方、特に「発問」が注目されており、学習者の思考を方向づけるための教師の主発問や補助発問などを意味する「発問」の役割は、授業において非常に重要であると考えられる。

しかし、実際の学校現場では、発問が学習者に与える影響を必ずしも十分に意識され、有効に活用されていない現状がある。そこで、本研究は、中学校社会科・地理的分野「ヨーロッパ州」の授業実践を対象に、「発問」の一つである「主発問」が生徒の思考にどのような影響を与えていたのかを、実践校の対象生徒のプリント記述やアンケート記述分析を通して明らかにし、発問の再構成を通じた単元構成の再検討により、「発問」を活用した授業改善の方向性を示すことを目的とする。

2. 研究の方法

本実践は、大阪府内の中学校第1学年2クラスを対象に、社会科「ヨーロッパ州」の単元を6時間分、各時に主発問を設定して実施した。第1時はヨーロッパ州の自然環境を、第2時はヨーロッパ州で信仰されている宗教や話されている言語を学習した。第3時からはEUに関連する内容を扱い、第3時ではEUの基礎的事項を、第4時では農業とEUの関連を、第5時では工業とEUの関連を扱った。最後の第6時ではEUのヨーロッパ統合によって生じる課題を追究した。

本研究では、その中でも第3時から第6時の授業実践を分析対象とした。分析資料は、生徒のプリント記述（49名分）および事後アンケートの自由記述（55名分）である。プリント記述は、①事実や資料の内容をそのまま述べている記述、②資料の内容をもとに理由や背景を説明しようとしている記述、③複数の要因を関連づけて考察されている/理由や背景が具体的に説明されている記述の3観点に整理し、事後アンケートの記述は、A. 発問・考える活動に言及している記述、B. 学習内容への興味・関心の広がりについて言及している記述、C. 授業構成・導入（クイズ）に言及している記述、D. その他の4観点に整理した。

3. 分析結果

分析の結果、第3時ではEUの制度的特徴に着目した記述が多く、主発問が生徒の視点をEUの特徴へと焦点化する役割を果たしていた。一方で、第4時では、主発問で扱う題材を絞り過ぎた結果、①の段階にとどまる記述が増加してしまった。第5時以降は、②の段階に到達して

いる記述が一定数みられた。しかし、単元全体を通して、明確に③の段階に到達しているといえる記述は見られなかった。これらのことから、主に3つの特徴が明らかとなった。第一に、第3時と第4時は特に思考段階に偏りが見られた点である。第3時と第4時は①の段階の記述が多数を占めており、②の段階に到達している生徒は少数であった。しかし、第5時、第6時と進むにつれて、②の段階に到達している記述が増加した。第二に、③の段階に到達している記述が第3時から第6時を通してみられなかった点である。そして、第三に、既習事項を踏まえた記述がほとんどみられなかった点である。

4. 考察と授業改善の方向性

第一の、第3時・第4時と第5時・第6時を比較して、②に分類される記述が増加したという点から、発問によって思考する活動を通して、具体的に記述する意識や資料を根拠に考える意識が養われ段階的に思考が深まっていった様子が見えてくる。

第二の、③の段階に到達している生徒が見られなかった点においては、各時の主発問が単時の学習課題としては機能していたが、小単位ごとに関連づけられたものとして機能していなかったことが要因として挙げられる。また、教師が、複数の資料を用いて思考したり、他の地域と比較して考えたりするように、生徒に促していなかったことも考えられる。

第三の既習事項を踏まえた記述がみられなかったという点においては、第二の要因に加えて、補助発問、つまり問いかけを工夫することで改善がみられる可能性がある。

これらの考察を通して、本実践にて設計した授業の第3時から第6時の発問を再検討し、単元全体の学びをどのように再構成できるのかについて考える。

5. 結論と本研究の意義

本実践の発問は、生徒の思考を方向づけ、資料に基づく記述を促す点で一定の効果を有していたが、単元を通じた発問の関連性や、思考を段階的に深める単元構成のあり方に課題が残っていたと考えられる。そこで、本研究は、第3時～第6時の主発問および補助発問を再構成し、各時の学習内容を関連させた単元構成の改善案を提示した。本研究の意義は、発問の有効性を明らかにし、小単位ごとの単時の問いとしてではなく、単元全体の学びとして捉え直し、授業改善のための一視点として活用した点にある。